

波災害および原発事故も生じていたため、これまでにあった他の災害と比べ特殊性が増している。震災発災直後、障害者や高齢者が取り残され避難所に入れないといったことも多くあったが、障害者や高齢者でなくとも避難がうまくいかなかったケースも多くある。そのため、過去を反省し様々な人々の知見から対策を練り直すことは必要だが、発災当初は誰しもが必死であるため、批判ばかりになってしまうとお互いの傷つけ合いにとどまってしまう。この点においては、生存学で「障老病異」を研究対象とする際には、そうではない人々のことをどのように定義するのか、そして対照群として比較することが、当時何が起こっていたのかを知る上でも重要であるように思う。

しかしながら、震災関連の書籍が多くある中、本書は「生存学」として当事者の視点からも丁寧な事例が積み重ねられており、非常に参考になるものである。特に、災害を経験したことが無い方や実態を知りたい方にお勧めしたい。

#### 新刊紹介

平山正実・斎藤友紀雄監修

『自死遺族支援と自殺予防——キリスト教の視点から』

(日本キリスト教団出版局、2015年)

森山花鈴

本書は、キリスト教月刊誌『信徒の友』に2年間にわたり連載された「シリーズ自死」が書籍化されたものである。精神科医であり遺族支援のNPOの理事長でもあった故平山正実氏、そして日本いのちの電話連盟理事であり日本自殺予防学会理事長である斎藤友紀雄氏(日本基督教団牧師)が監修している。自死遺族支援を切り口として、過去、そして現在のキリスト教における「自死」の扱いにも踏み込んだ内容となっている。

第1章「自死遺族を支える」では、精神科医の石丸昌彦氏(キリスト教メンタルケアセンター理事)が「死に引き寄せられるのは病気の症状ゆえであって、その人本来の願望ではない」と述べる。また、平山氏も「自死者は自分の自死行為に責任があるのか」という問題について、自らのクリニックを訪れた遺族に調査を行い、多くの自死者が何らかの精神疾患に罹患し精神科を受診していたという事実を記すことで、自殺に関する誤解を丁寧に解いている。第2章「自殺予防の取り組み」では、専門職だけでなく、一般の人でもできる取り組みが説明される。また、実際に自殺者の葬儀の際に気を付けるべき点についても明らかにされている。さらに、「自殺をしたい」と打ち明けられた場合にすべきこと、すべきではないことも記されており、身近に自殺を考える人がいた場合にも役立つ内容となっている。第3章「死にたい人と自死遺族と自死者のために」では、「誰もが自殺予防に関われる」ことを提起した上で、当事者や遺族支援、自殺予防活動をしている人たちの声を紹介しており、現場の実情を知ることができる。

平山氏と斎藤氏は日本の自殺対策において先駆的な活動をしてきた方々である。本書は、この両人がキリスト教の視点からこれまでの自殺対策を振り返り、まとめ上げた本となっており、宗教と死の関係について関心がある方にもお勧めしたい。

本橋豊著

『よくわかる自殺対策——多分野連携と現場力で  
「いのち」を守る』

(ぎょうせい、2015年)

森 山 花 鈴

「自殺対策」とは自殺予防、遺族支援までを含めた対策のことを指す。また、自殺の要因には様々な問題が絡むため、自殺対策には多分野からのアプローチが必要となる。たとえば、経済的な問題を抱えた上でうつ病を発症し、列車への飛び込み自殺を図ったケースがあった場合、経済的な面、医療的な面、そして物理的な面でも介入ポイントは複数ある。これらの介入ポイントで、それぞれ個々に対策を練ることも重要であるが、それでは根本的な解決にはならないため、本書の副題にあるように「多分野連携」が重要となってくる。

本書は3部構成となっており、第1部「自殺対策のいま」で統計や自殺対策の地域介入研究について記し、自殺対策の研究や現場の実践結果（東日本大震災発災後の対策を含む）を明らかにしている。また、海外やWHOにおけるレポートも掲載している。第2部「自殺対策の最前線」では、各地の具体例を提示し、自死遺族支援にもスポットをあて、遺族支援の活動を行っているNPOの代表者がそれぞれの活動を記している。さらに、自殺多発地域と呼ばれる場所で水際対策に従事するNPOからの報告や職場のメンタルヘルスについても記されている。第3部「実践と理論に基づく、自殺対策のこれから」では、多分野横断的に官・民・学それぞれの立場の専門家が執筆者に名を連ねており、これまでの自殺対策の経緯、多重債務問題や連帯保証問題、経済学や公衆衛生学からみた自殺対策の動向、マスメディアと自殺対策について説明されている。

本書の特徴は、多分野の執筆者が多いことである。NPOなど現場の人から、行政（国、地方）、大学の研究者でも医療系にとどまらず多くの人が参加している。執筆者だけで50人を数えるということだけで、その多さがわかるだろう。

本書は自殺対策の歴史や現状が記されているため、自殺対策の現状を知る導入書となっている。